

● 基調講演

1 父、金壽卿 |

キム ヘ ヨン* ・ キム テ ソン**
金 惠 英* ・ 金 泰 成**

まえがき

本稿は、2013年11月9日、日本の京都にある同志社大学において、同志社大学人文科学研究所の主催で開かれたシンポジウム「北に渡った言語学者・^{キムスギヨン}金壽卿の再照明」における講演原稿である。

朝鮮半島が分断された後、金壽卿の学者としての道は広く知られているとはいいがたいし、いわんやその成長の過程や個人的な側面はほとんど知られてはこなかった。金壽卿の言語学者としての業績や様相は、このシンポジウムにおいて他の研究者らが扱うことになるので、遺族である私たちとしてはただ金壽卿の個人的な側面を振り返るにすぎない。それさえも、^{ユギオ}6.25〔朝鮮戦争〕当時に離散家族となった金壽卿の遺族として、残っている限られた資料と、場合によっては確認するのも難しい情報にもとづいて準備した講演である。その点寛くご理解いただきたい。講演の時間的な長さの制約もあり、詳細に扱うことができなかった部分もあるが、比較的詳細に作成された年譜を合わせて参照していただきたい。

*金惠英：金壽卿の次女 **金泰成：金壽卿の次男

はじめに

まず、今回のシンポジウムを開催して下さった同志社大学と、準備のために苦勞された全ての方々に深い感謝のことばを申し上げます。あわせて、分断された朝鮮半島の数多くの離散家族のうちの一家族として、全ての離散家族の希望がかなえられることを願う切なる思いも伝えておきたいと思います。

板垣竜太先生が論文「金壽卿の朝鮮語研究と日本」で、父の家庭背景や学生としての成長過程を紹介されているので、可能なかぎり重複を避けたいと思います。そのため、私たちの話は、父の個人史というよりは、父を想いながら生きてきた人々の話、「人間・金壽卿」に関する断片的でまとまりのない話となりますので、その点を理解くだされば幸いに存じます。

一般に自らの父について語る人たちは、「一緒に暮らしていたから知っている父」について語るのですが、私たちの場合は「話に聞いて知っている父」になるかと思います。文献上の父は「越北した学者」ですが、私たちにとっては「別れていても、常に一緒にいる父」でした。母は言うまでもなく、祖母も別れた息子を忘れられず、私たちとともに暮らしながら、自然に父という存在を私たちの生き方のなかに植えてくれたのですが、それが私たちの成長過程におよぼした影響は計り知れないほどありがたいものでした。

父の学者的な面貌は、私（次男・金泰成）が中学生の頃から外国語と国語に関心を持つようになった刺激剤となり、結局私も学問を職業に選ぶことになったのですが、その契機になったのではないかと思います。

一方、父の存在は私たち家族にとって重荷でもありました。父はただ学者であっただけで、政治家だったわけでもないにもかかわらずです。父の存在はほとんど隠していました。父については友だちにすら気安く言うことがはばかられ、誰かが父について聞いてきた場合はひどく困ったもので

す。私が大学に通っていた頃、父を知る教授にも、私が父の息子であることをあえて明らかにしませんでした。

では、これからはじまる私たちの話は、おばあちゃんやおじいちゃんの昔話として聞いていただければと存じます。

1. 意地っ張りの子、青年になる

1-1. 物静かながら意地の強い子

「金弁護士の家の下の息子」として育った父は、幼い頃から、家では「静かでおとなしいが、自分が正しいと思うとそれを曲げない子」と言われていました。3～4歳の頃の逸話ですが、父自身が間違っていたわけではないことに対し、祖父が煙管のようなものを口にくわえさせる罰を与えながら「許しを請え」と言ったところ、1時間以上じっと動かずにそれをくわえ続けることで自らの潔白を主張し、大人たちを驚かせたという話があります。

言語学としての文献学（ドイツ語では Philologie）の意味は、語源からいえば「ことばへの愛」と解釈できますが、父は幼い頃にこっけいな言葉遊びを面白がったといえます。「トンコル村のトンさんがトソバン頭テガルトンをぶつけてボッコオルトンボッコポルトン」などと言いながら楽しんでいたものでした。日本語で授業をする、日本人のための学校であるグンサン群山公立中学校の生徒となつてからは、雄弁大会に出場して賞をとったりもしたといえます。

後に京城帝国大学に入学した15歳の少年は、マントを誇らしげに着る普通の予科生とは異なることなく、チョンニヤンニ清涼里の自然のなかで学校生活を楽しみ、学問の道に足を踏み入れたのでした。私たちの手元に少し残されている予科時代の写真のうち、次の写真【図1】を見るたびに、私たちは胸のつまるような思いになります。裏面に小さな文字でイギリスの詩人トマス・グレイ（Thomas Gray, 1716-1771）の詩「田舎の墓地で詠んだ挽歌（Elegy Written

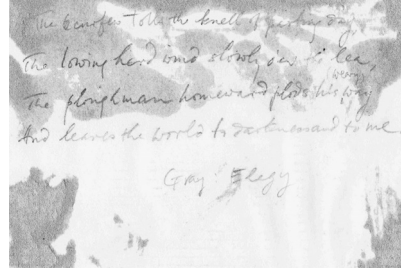


図1 田園風景写真

(備考) 1934～37年頃。京城帝国大学予科周辺の清涼里の田園風景と、父が裏面に書いた“Elegy Written in a Country Churchyard”の最初の部分。

in a Country Churchyard)」の最初の部分が英文で記されているからです。

実をいえば、有名な詩だから私たちが感動を受けるのではなく、繊細で物静かな性格の15～6歳の少年が学校で学んだであろう英詩を写真に書いている場面を想像すると、その手つきが見え、また息づかいが感じられるようだからです。

京城帝国大学ということばを聞くと、私たちは、小さい頃に祖母や母から、その大学にいた立派な学者についての話を、隣のおじさんの話のようによく聞いていたことが思い出されます。言語学の教授だった小林英夫¹、小倉進平、哲学教授の安倍能成といった先生方は、私たちが幼心に聞いて知っていましたが、まるで父から直接聞いたかのような感じでした。

¹ The curfew tolls the knell of parting day, 晩鐘が夕暮れのしらせを告げ
The lowing herd wind slowly o'er the lea, 牛の群れが鳴きながらゆっくり草原をめぐり
The ploughman homeward plods his weary day, 一日疲れきった農夫は重い足どりで家路につき
And leaves the world to darkness and to me. そして世界を暗闇とそして私に残してゆく

² 小林英夫教授は父を弟子と思って、さまざま誠意をこめてくださったことを、彼の随筆「教え子」から知ることができる。

1-2. 東京生活と結婚

1940年4月に東京帝国大学大学院に進学した父は、同年配の親戚である画家の^{キムミング}金敏龜氏と親しくしており、韓国美術史の権威である^{フアン スヨン}黄壽永博士（1918-2011、1941年に東京帝国大学経済学部を卒業）ともこの時期に交流していたようです。そんな縁から、父の美術に対する関心は、ある意味当然ことだったかもしれません。わが家では母の側も文学、芸術に関心をもつ者がおり、学問と芸術を愛する雰囲気は今も家のなかで漂っています。

父は長期休暇のたびに帰郷していたようですが、1942年の春休みの時に結婚した友人の^{トッルロリ}付き添い人をした際に、新婦側の付き添い人をしていた梨花女子専門学校文科出身の背の高い女性と出会うことになりました。その翌年の春休みには、この2人の付き添い人が結婚することになりました。

最近の若者だったら、仕事もない学生を夫に選んだ母を愚かな新婦と思うかもしれませんが、両親の結婚は物質よりは相手の価値観を重要視した、2人の理想主義者の交わりでした。父は母にワーズワース（William Wordsworth, 1770-1850）の「質素な生活と高遠な思索（Plain living and high thinking）」という文句を生活の信条にしようと言ったといえます。

父は京城帝国大学予科の時代からさまざまな外国語に通じていたと言われていますが、ご承知のとおり、外国語を高い水準で習得するためには不断の努力と粘り強さが必要で、多くの時間を投資しなければなりません。ですから父は学生時代から寸暇を惜しむタイプで、結婚後、東京で勉強していた時には、母が理髪してあげる間にも本を読んでいたといえます。

1-3. 戦争から逃れて

短い新婚旅行の後、東京で暮らし、夏休みになってソウルに帰った両親は、祖父の用意していた^{ヘプア}恵化洞の家に住むことになりましたが、父は開講しても東京に帰りませんでした。いくつか理由はあったでしょうが、京城帝国大学で無給の助手として働いて、学徒兵の召集から逃れようとしたの

が大きな理由のように思われます。祖母と母を通じて常に父を感じながら育ってきた私たちは、これを単純に「召集から逃れることを望んだ」というよりは、「戦争自体から逃れることを望んだ」と考えたいと思います。哲学、言語学、文学、芸術に囲まれて過ごした父にとって、戦争は「出て行って戦って勝つべきもの」ではなく「起こしてはならないもの」だったと思うのです。

父は、解放をむかえた1945年の12月から京城経済専門学校（解放後にソウル大学校商科大学となる）で教鞭をとるようになって初めてお金を稼ぐようになり、母は年子の面倒を見るようになりましたが、そこから「夫は職場に出て、妻は子を育てる」という平凡な家族生活が始まりました。父は普通の父親のように、2人の赤ちゃんの写真を洋服の内ポケットの手帳の中にいつも入れて出歩いていたといえます。

2. 平壤

2-1. 驚くべき決定

2人の子を育てる夫婦の睦まじい生活は長く続きませんでした。1946年8月16日の晩、父は母に、新たに創立される^{キムイルソン}金日成大学（以下「金大」）の教授要員となってほしいとの委嘱状に応じて^{ピョンヤン}平壤に行くという驚くべき話を切り出し、そして夜中に^{キムソッキョン}金錫亨と^{パクシヒョン}朴時亨という2人の友人とともに出発しました。その頃は既に38度線を越えるということは安全ではなくなっていました。母は来月94歳になりますが、父が重大な話を出発のまさに前夜にしたことに、今も寂しい気持ちでいます。

その2ヶ月後、母は、やはり危険を顧みず、子どもたちを連れて平壤に行き父と合流しました。それから金大の建物が向かいに見える金大の教員社宅で、仲睦まじい家族生活が再開されました。この時期は、わが家が「落ち着きつつある時期」だということが出来ますが、母はまた2人の子

どもを年子で産んで、4人の子を育てることとなり、父は講義を受け持って忙しい生活を送りながらも、著述活動を活発にしていました。

父は金大でロシア語も教えていましたが、父と年齢差がかなりある叔母〔金壽卿の妹〕は、兄を教授にもつ、金大のロシア語専攻の学生でした。叔母は何でも一所懸命する性格で、ロシア語専攻の学生のなかでも成績が最も優秀でしたが、父は他の学生に1等の点数をあげ、叔母は2等級の学生にしかありませんでした。叔母は父に抗議しましたが、父は最後まで席次を変えなかったといえます。今80代後半の年齢になる叔母は、父から習ったプーシキン (A. S. Pushkin, 1799-1837) の詩を、今も目をそっと閉じて語っています。

先に、父は寡黙な性格だったと申しましたが、事前の予告もなく、食事の時間に友人を家に連れてくるほど、友人との交遊を大事に考えていました。母がそうした突然の客への接待に当惑すると、父は「ああ、匙をもう1本置いておけばいいんじゃないか」と言っていたといえます。

2-2. 行き違い

1950年6月25日の戦争勃発後、8月に父も金大教員らによって構成された短期宣撫工作隊の一員として南へと派遣されました。父は全羅南道^{チョルラナムド}まで下っていった後、〔同年9月の国連軍による仁川上陸作戦以降〕人民軍に従い北へと後退する過程で、他の金大教員らがみな平壤に戻ったにもかかわらず、父だけが戦地に引き返すことになりました。さまざまな外国語、特に英語を駆使する父を人民軍が必要としたためでした。外国語放送を聞くこと、国連軍を意識した通訳などに備えて父を必要としたのではないかと思います。

同じ年の9月、国連軍が北進してきた頃、金大教員の家族らは爆撃を避けるために平壤近郊の田舎へと疎開していたのですが、金大教員らは教えるという本来の任務に復帰するため、1人また1人と帰ってきました。ですが、父の姿は見えませんでした。母は最後の帰還者と見られた父の友人・

キムドククチュン
金得中教授から、もうこれ以上帰ってくる金大教員はいないだろうという言葉を聞き、重大な決断を下しました。危険を顧みず、家長を探して南へと下ろうという決定でした。他の避難民に混ざって、いつどこで爆撃を受けるか分からない私たちの避難が始まりました。危険極まりない避難の道程でしたが、その時には不平やわがままを言ったりする子どもはいなかったといえます。黄海道^{ファンヘ}まで来たとき、ある村の家に入って、少しのあいだ休ませてほしいとお願いしたところ、その家の主人は乞食のような身なりをした多くの避難民に心のこもった昼食をふるまったといえます。母は今も、可能ならばあの家の主人に何かお礼をしたいと言っています。長々と続く避難の途中で、荷物を積んでいない米軍トラックが見えました。母はソウル駅まで乗せてほしいと、若い米兵に英語でお願いしました。そのおかげで他の避難民とともに私たちは疲れきった体をトラックの上で休ませることができました。父は英語ができたために家族のもとに戻れず人民軍に従軍しなければならなくなり、母は英語ができたために米軍のトラックに乗せてもらうことができたというのは、戦争の皮肉としか言いようがありません。

父が人民軍に従って北へと後退する道程は、文字通り千辛万苦の道でした。九死に一生を得て故郷の通川^{トンチョン}に帰ってみると、村は爆撃で灰の山となっており、親戚も見当たりませんでした。ついに1951年3月初めに平壤の近郊に着き、金大教授だった父の母方の叔父³の家族にまず会ったのですが、そこで叔母から、家族が父を探して南下したという消息を聞いたのでした。

³ 経済学部教授・李^イジョンシク 種植。

3. 離散家族となって

3-1. 六角亭

父母も当時の多くの人々と同様に、朝鮮半島がこれほど長期にわたって分断することになるとは思ってもいなかったので、ソウルの恵化洞の家をそのまま置いておき、ソウルの明倫洞^{ミョンニョン}に住んでいた父方の伯父にその管理を任せて越北したのでした。

家長を探す母が家長となって恵化洞の家に戻ってきた時には、戦火のただ中に裸同然で避難してきた人々が被っていたさまざまな困難を経験することになり、なじみの家まで手放さなければなりません。幸い伯母の実家の配慮により、伯父の家族と私たち家族は全羅北道に行き暮らすことになりました。母は「良民証」^{レムジンジョン}がなく、仕事に就くことができなかつたため、私たち家族は沃溝郡臨陂面^{オックインピ}でしばらく避難民向けの配給によって延命しました。経済的な困難のない家庭で育った母は、嫁ぎ先の姻戚にまで頼って生活するしかなかったという事実をなかなか受け容れられなかったといえます。

私たちは臨陂で、伯母の実父が友人たちと風流を楽しむ時のために建てた別荘「六角亭」^{ユクモジヨソ}で暮らしました。その建物は名前どおり壁面が6つ、つまり六角形をしており、自然と調和するように美しく設計された2階建ての家でした。そのようなすばらしい家で、食べることの心配ばかりしなければならぬというのは、これもまた戦争のもたらしたアイロニーでした。

4 ^{キムドンチュン}金東椿（聖公会大学校社会科学部教授）の「民間人虐殺問題、なぜどのように解決しなければならぬのか」（『新たに明らかになる現代史記録』88、2000年6月12日）に「朝鮮戦争当時、戦線が行ったり来たりするなかで、誰が敵であり誰が見方なのかという点が不明確になると、周辺の保証を通じて、国軍が入ってきた後、治安と秩序を維持するために、大韓民国に協力しようという住民を良民として分類したのである」とある。良民証は「良民」であることを証明する小さなカードだった。

ですが、私たち家族にとって最も凄惨な戦争のアイロニーは、人民軍が英語の知識をもつ父を重用した半面で、戦争の最中に祖父が人民軍によって虐殺されたということです。混沌と混乱の時期に、双方の軍隊による民間人虐殺があったということは、朝鮮半島の歴史においてまことに胸の痛むことです。

3-2. 小さな希望の種

私たちの避難民生活が終わったのは1953年4月、母が慶尚南道〔密陽郡〕武安面の武安中学校で教えはじめてからのことでした。伯父〔金壽卿の兄〕が、今の全北大学校の前身となる裡里農科大学校⁵で農業経済学の教授となったのですが、同じ大学の教授⁶を叔母〔金壽卿の妹〕に紹介し、2人は結婚しました。叔母の夫の妹は、武安中学校から他の学校に転動したのですが、その後任として母を推薦してくれたおかげで教員となれたのでした。公立学校の教師となった母は、良民証も難なく持てることになりました。ようやく母は仕事をもった家長となり、私たちと一緒に住んでいた祖母が子ども4人の面倒をみる主婦の役割を受け持つことになりました。2人は父と再び会えるだろうとの希望をもって、1日1日を過ごしたのでした。

ところが、私たちがだいぶ大きくなってから知った話なのですが、政府の情報機関からしょっちゅう人がやってきて、母に「夫の生死を知っているか？夫とどんな連絡をとっているのか？」などと疑いをもち、犯罪者に尋問するかのように煩わしくふるまったといいます。この問題は、後に政府でおこなった「戸籍整理期間」に、母が父を「死亡」と戸籍整理できるようになったため無くなったのですが、書類上であっても夫を死者に仕立

⁵ 1947年10月15日開校。1951年に全北大学校に吸収統合され、国立全北大学校と名称を変更した。

⁶ 植物病理学教授・金侗熙。キムジョンヒ

て上げる妻のつらさは容易に想像できます。

1950年代末、母は待ち焦がれていた報せを伯父から聞くことになりました。前に触れた小林先生が、金大の父から安否を尋ねる書簡を日本で受け取ったとの消息が、ソウルの国語学者・李崇寧^{イ スンニョン}先生を通じて伯父に伝えられたのです。母がこのことを教えてくれたのは、私たちが少し大きくなってからのことでした。それは、私たちと似たような状況にある離散家族が、さまざまな面において慎重に生きなければならなかったためです。父の生存の消息は何よりも嬉しいことでしたが、私たちが行けない平壤にいるということが、欲深い人間としてはもどかしく思いました。この消息は私たちの胸に希望の小さな種を植えてくれた一方で、私たち家族はこの希望を現実へと変えるためには何をどうすればよいのか、分かりませんでした。祖母は時おり母に「今日の新聞に、ねえ、統一するという記事はないかい？」と聞くこともありました。

そうしたなか、祖母はあれほど愛する息子に会えないまま亡くなってしまいました。これは私たちの胸に恨^{ハム}として残っています。私たちが幼かった頃、祖母は寤寐^{ごびふぼ}不忘〔寝ても覚めても忘れないこと〕、父のことばかり考えていましたので、母は「もし家族のうち1人だけお前たちの父と再会が許されたとするならば、私はお前たちのおばあちゃんにその役目を譲るよ」と言っていたこともあります。後に父は祖母が亡くなったという話を聞いて、「その墓でもさすってみたい」と言い、深く悲しんでいたといえます。

母が慶尚南道^{キョンサンナムド}の教育庁所属の教師だったため、規定により、私たちが同じ場所に長いこと住むことはできませんでした。武安から密陽^{ミリヤン}、進永^{チニョン}へと引っ越し、1961年から、母は釜山^{プサン}市教育庁の所属で働くことになり、私たちは釜山でずいぶん長く暮らしました。私たちはオリンピック大会の前に聖火を持って開催会場まで走っていく人のように、胸の中に小さな希望の種を抱き引っ越しを繰り返していたのです。

母は、成長していく子どもたちの進学、進路決定、結婚等について父と

相談するようなこともできず、さまざまなことを1人で決めなければならなかったのですが、そうした時には、父への想いが一層強まりました。その「想い」というのは、もちろん父を慕うものでしたが、時に父のせいで子ども4人を1人で育てなければならぬという重荷を担うことになったことに対し、父をうらむこともあったようです。韓国では毎年母の日になると「母の恩恵」という歌を歌いますが、私たちはこの文章を書きながら、父のみならず、母の恩恵を振り返ることになりました。私たちはこの歌を毎日歌っても、母の恩恵に報いることはできないと思います。

3-3. 長女の決断

私（次女・金惠英）の姉（長女・^{キムヘジヤ}金惠慈）もまた幼い時には童詩を書くことを楽しむ性格でしたが、大学進学を前にして看護学を勉強することに決めました。当時、看護師は北米やヨーロッパに移住しやすかったので、海外で父の消息を知ることができるのではないかとというのが姉の考えでした。

姉は看護学を学んだ後、カナダへの移民手続きを進めていた青年と結婚することになり、1970年にカナダに移民しました。その後、姉が家族を招待することにより、私、兄、母と順にトロントに集まることになりました。弟〔金壽卿〕を慕っていた伯父までが1974年に亡くなってしまったことで、私たちの焦燥感は一層強まりました。それでも、平壤訪問の機会がいずれ来るのではないかと、カナダの市民権を獲得すること以外には、特にすることもなく私たちは歳月を過ごすことになりました。

1960年代に韓国外語大学にいらしていた東北大学教授の中村^{たもつ}完先生から、私の従姉⁷が日本語を学んだことがあったのですが、その縁もあり、私が1983年に日本を訪問した際に、仙台まで中村先生を訪ねました。中村

⁷ 伯父（金福卿）の三女・^{キムワンシク}金旼植。

先生は1980年に平壤で父に短時間会われたのですが⁸、その話を聞き、撮った写真をいただくために行ったのです。中村先生が撮られた写真は、別れた後初めて見る父の写真でした。その日私は仙台から東京に戻る新幹線のなかで、窓の外に広がる風景も楽しむことなく、金日成大学ではなく中央図書館で勤務しているという父のことを想い、交錯する万感を振り払うことができませんでした。中村先生は、父が京城帝国大学の助手だった頃によく知っていた言語学者・河野六郎先生の弟子で、平壤訪問時に可能であればよろしく伝えてほしいという師匠の依頼を受け、挨拶しに行ったのでした。中村先生の紹介で、私はもうご年配の河野六郎先生にも東京でお目にかかりましたが、中村先生と河野先生の温かいお声は今も耳に響いています。

3-4. 講演会に行ったわけ

1985年のある日、母は、トロントを訪問中だった延辺大学の歴史学教授・高永一^{コヨンイル}先生の講演があるとの広告を見て、その講演会に行き、高永一先生に一つお願いをしました。平壤の家族に手紙を人便〔人づて〕で渡してほしいというお願いでしたが、世界は狭いもので、高永一先生は1956年に延辺大学を訪問した父を記憶しておられました。高永一先生の助力により、私たちは1986年の春に父の手紙を人便で受け取りました（附録1参照）。その後、父とカナダ在住の家族はカナダの郵政当局を通じて、時間はかかっても問題なく手紙をやりとりすることができました。高永一先生への感謝の気持ちは忘れられません。

父の最初の手紙には父の再婚の事実が書かれており、母の心は傷ついただろうと思いますが、後の父の説明では、場合によっては母にはその最初

⁸ 中村完教授は、1980年11月に東北大学学者訪朝・訪中団の一員として平壤を訪問した。

の手紙しか送れないかもしれないという事態を想定し、母〔妻〕をおもんばかる父〔夫〕の心情とともにあらゆる事実を手紙で知らせるのがよからうと考えたからだということでした。ここにも父の性格の一面を見ることができます。愛する家族と別れるという経験をした父は、手紙でも「別れる」ことになるかもしれないという心配をしていたのだと思います。父は、再婚したという事実について、母にいつも許しを請いたいという心情でいたようです。一方、歳月が流れ、母は、父が再婚しないでは個人的にも対外的にも耐えがたい状況におかれていたのではないかと考えることで、心を落ち着けているようでした。

4. 北京にて、その後

4.1. 父子の再会

私（次女・金恵英）は、1988年8月に北京大学で開かれた第2次朝鮮学学術討論会に参加し、平壤の学者らとともに来た父と会うことになりました。この父子再会が果たされたのには、北京大学教授・崔應九先生^{チュウウング}のお力添えが大きく、トロント大学教授の白應進先生^{ベクウンジン}の隠れた助力もありました。この場を借りて感謝申し上げます。

私はカナダに移民してきた後、2番目の子が2歳になった頃に、文理科大学の教科課程に対する好奇心が生じ、再び学校に入りました。もちろん私自身の興味もあったのですが、父の消息を聞く道が開かれるかもしれないという漠然とした考えから、言語や言語教育方面の勉強を少ししました。そうしていたところ、私の家族の背景が周りにも少しずつ知られるようになり、言葉や思いが種になると言われるとおり、私の漠然とした思いは芽を伸ばし、このお2人が再会を手助けしてくれることになったのでした。

1週間の学会の期間中、父は崔應九先生の配慮により、参加者のうち唯一シングルルームに泊まっていたのですが、それは父子が1つの部屋で自

由に話せるようにするためでした。

父の部屋に私を連れて行った人がドアをノックすると、父は部屋の中に私だけを引き入れ、ドアを「無礼」ともいえるほどピシャッと閉め、私をぐいっと抱きしめました。38年ぶりの抱擁が何分間続いたのか、今も思い出すことの難しい、ただ「永遠」ともいべき時間でした。父は、この父子再会について、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の『ファウスト』を引用しながら、「時よ、止まれ！」とのことばで、その喜びを表現していました。昔の青春時代に戻ったかのようだとも言っていました。

先ほどみなさんに、父が戦争の時に金大の教員らと南に下った後、北へと後退する過程について語りましたが、これは北京で父から聞いた話でした。毎日、学会の参加者らとの夕食が終わると、私が父の部屋に行って、しばらくのあいだ父と2人だけの時間をもちました。父は、私たち家族が行き違ってしまって互いに離別してしまった戦争当時の話をしきりにしてました。ですから夜になると、私に「さあ、また戦争日記を続けよう」と言っていました。

父が九死に一生を得て、長い行軍により疲れ切った体を支え、「懐かしい親戚に会えるだろう、ひょっとすると妻や子が私を探して通川に来ているかもしれない」と考えながら故郷である通川に行ったところ、目の前に広がった光景はベルギーの作家ローデンバック (Georges Raymond Constantin Rodenbach, 1855-1898) の小説『死都ブルーージュ (Bruges-la-Morte)』に出てくる場面と酷似していたと言っていました。その言葉を聞いて、父は戦争中にも文学的な感受性を失わずにいたのだとも思われました。

学会の期間中のある日、しばしの時間を割いて、平壤の家族に渡す贈り物を買うために、父とともに百貨店に行きました。服地を選びながら、父と布の色、模様、質感などについて意見を述べ合ったのですが、父と私の趣味が似ているということを知り、ひそかに嬉しく思いました。私は何日かのあいだ、知らず知らずのうちに「子どもの頃から祖母と母から聞いて

きた父」と「私の目の前で生きて動いている父」とがどのように異なるのか、あるいはどの程度似ているのかをずっと比較していたのではないかと思います。

私は父とともに過ごした時間が「完璧な2人だけの時間」になるよう、カメラや録音機のようなものですら、2人の間に入り込まないようにしました。私が38年間望んでいたのは、ただ幼い子どもが父と同じ部屋で一緒にいることで満足し、特に一緒に遊んだりしなくても良いぐらいに満ちたりた、ささやかな喜びを味わえるような、そんな平凡な時間を少しでももてればということだったので、父と特別なことをしない方が私の気持ちはより満足感を覚えたのでした。

血を分けた父子間でも、訊かない方がよいことがあるものですが、私はただ2人だけの自由な時間があつたにもかかわらず、父がこれまでの人生でおこなった選択に満足しているかとか、学者としての長い空白期にどんな思いを持っていたのかといった質問は、最後までしませんでした。

私は、父が学会の期間中にトロントの家族と電話で話す機会をつくりました。電話で話したという経験は、私たち家族にとって、特に姉にとって意味深い追憶として残ることになりました。それに加えて、父がソウルの弟〔金壽卿の次男〕に書いた手紙を、私は後に弟に渡すことができました。父は、その手紙で、弟が学者として完成していくことを嬉しく思うとしながら、ドイツの *Philologie* (文献学=言語学) をしっかりやれとの言葉を綴っていました。別れた子どもに直接影響をおよぼすことができなくても、学問の世界へと歩み始めた息子がいることを嬉しそうにしていました。

学会が終わった後、私は平壤見物をするようになりました。2泊3日間だけ滞在し、父と平壤の一番下の妹(金恵玉)とともに、清潔で美しい平壤やその周りを観光し、2日目の夜には父のアパートに行つて夕食をご馳走になりました。父が再婚した、平壤の弟妹らの母は、柔和な性格の持ち主のように思えましたし、弟妹も意志を強く持った若者として育てているよ

うに見えました。平壤の弟妹は、まだ会ったこともない兄姉に送る真心のこもった手紙を書き、渡してほしいと私に頼んできましたが、その心がけが立派だと感じました。それでも、父が「ここがお前の住んでいた金大教員の官舎4号室があった場所だよ」と言い、空き地を指さした時、一瞬「ああ、家族がこの官舎ですずっと住んでいたなら、いろんなことがどう変わったろうか。父が北に後退できずに、私たちが南下した後会ってみな一緒に暮らしていたら、どうなっていたらろうか」という、今さらどうしようもない考えがよぎってしまうのを禁じ得ませんでした。

4-2. 年賀状

父は、1990年1月、癌の闘病中だった私（次男・金泰成）の上の姉〔金壽卿の長女・金惠慈〕に対し年賀状を送ってきました（附録2参照）。姉は、父の切なる願いにもかかわらず、それから1年後に私たちのもとを去ってしまいました。4姉弟のうちで父との追憶を最も多く持っていた姉、父の消息を知るために家族を呼び集めた姉自身は、父とともに暮らす夢を果たせないまま、逝ってしまったのです。姉の闘病の報せを初めて聞いた時から、「すぐ良くなるだろう」という肯定的な態度で希望をふきこんでくれた父が、再会を果たせずにいる最初の子を失った心情は、子を持つ私としても計り知れないものがあります。

母は、その悲しみを、「何もない野」という時調〔朝鮮固有の定型詩〕の1首に込めました。

何もない野

静かな夕方の光が そっとさしこむ 何もない野
葉の落ちた枝 新しい芝までもが 行ってしまい
たった今失った 娘の姿を偲んで 三日月をいだく

清楚なお前の姿 三日月となつてほほ笑むのだな
 お前が遊んだ丘は 風のおこる いばらの道
 恨のやどつた お前の大きな羽が 新しい空を飛ぶ

5. 続く再会の機会

5-1. 続く再会

1994年夏には、私（次女・金恵英）の2人の子⁹が、元山市^{ウオンサン}で¹⁰開かれた「国際青少年野営大会」に、他の家庭の子らとともに、カナダ青少年代表として参加しました。その際、平壤で祖父と会う貴重な経験をしました【図2】。



図2 金壽卿と対面した孫（1994年8月8日、平壤）

（備考）左から平壤の弟・金泰雄（4男）、父、イム・ユジン、イム・ユラ

⁹ 娘、イム・ユラ（Grace Eura Im、当時18歳）と息子、イム・ユジン（Daniel Eugene Im、当時16歳）。

¹⁰ 朝鮮民主主義人民共和国^{カンウオン}江原道^{ヨンファン}東海岸永興湾にある市。江原道の道庁所在地であり、近くの松濤園海水浴場と明沙十里が有名である。

父は、私の子どもにたくさんのプレゼントをくれたほか、1989年に出版された父の著書『三国時期言語歴史に関する南朝鮮学界の見解に対する批判的考察』も1冊送ってきました。この本のなかには、1993年夏に白頭山^{ベトトッサン}¹¹に登って撮った写真【図3】が添えてあり、母に送ったメモ（附録3参照）が入っていました。父は、終生登山を好んでいたのですが、75歳にもなって若い人たちのあいだに混じって、朝鮮半島で最も高い白頭山に登ったのです。そのことで、自らの望むことをするためには、体力を養わなければならないという模範を私たちに示したのです。

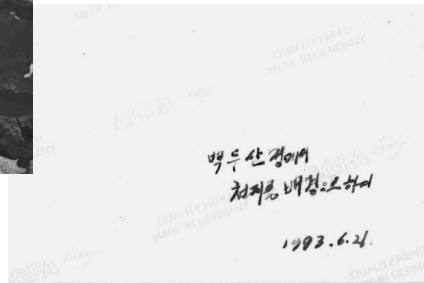


図3 白頭山に登った父（1993年6月21日）

（備考）写真裏面に「白頭山頂で天地を背景として」と書いてある

母に送ったメモ【図4】は短いものですが、父の性格の一面を垣間見ることができるので、みなさんとも共有しておきたいと思います。

¹¹ 朝鮮民主主義人民共和国两江道三池淵郡と中華人民共和国吉林省にまたがる休火山。高さ2,744m。

남 재 앞

이 책은 1988-89년 겨울 동안 원산 송도원에서 쓴 것입니다. 그때로부터 40년 전인 1949년에 대동강변에서 『朝鮮語法』을 쓰면서 당시의 정황을 성실하게 기록한 것을 생각하면서 귀속에 올리는 당시의 기록을 속삭임의 리듬 같은 가을의 이미지가 넘은 때였으므로 해리 뒤를 내며 쓸까리 쓸수 있었읍니다.

1990년 여름 밤낮으로 근하리던 것인데 기회를 잃어 겨우 이번만 보았습니다. 송도원 근처에 사영소에 갔다오는 중엔 친구의 편지 보내게 되었고 무슨 말이 남의 보르렀읍니다

내용이 성격상 해영이 아니라 평은향 것입니다.

1994년 8월 15일

황

図4 父が母に送ったメモ（1994年8月15日）

南載へ

この本は1988～89年の冬のあいだ、〔江原道〕^{ウォンサン}元山^{ソンドウォン}の松濤園〔休養地として有名〕^{デードンガン}で書いたものです。その時から40年前の1949年に、大同江〔平壤市内を流れる河〕の川辺で『朝鮮語文法』〔朝鮮語文研究会著として出版〕を書いていた頃に、あなたが積極的に声援を送ってくれたことをいつも考え、耳のなかに響くあなたの鼓舞のささやき声を聞きながら、もう70歳を過ぎてからでしたが、力と勇気を出して最後まで書くことができました。

1990年夏に会ったら渡そうとしていたものですが、機会にめぐまれ

ず、ようやく今になって送ります。松濤園の国際野営所に行ってきたユラ、ユジンを通じて送ることになったのは、何か意味があるのかも知れません*1。

内容の性格からして、恵英にとってより必要なものでしょう。

1994年8月15日

壽

このメモに書かれた、「1990年夏に会ったら渡そうとしていたものですが、機会にめぐまれず」という言葉は、母が1990年夏に平壤を訪問したらその時にこの本を渡そうとしたのに、それがかなわなかったという意味です。父は1988年夏に私と会った後、母に1990年夏に平壤を訪問するよう計画を立て、何度も懇願していました。

続いて、1996年には私の兄がトロントの離散家族何人かとともに平壤を訪れ、父に会いました【図5】。父は兄に対し、「お前たちに鉛筆1本、菓子1袋買ってやれなかった」と言い、申しわけなさそうにしていたといいます。



図5 父と長男・金泰正の46年ぶりの再会（1996年7月17日、平壤）

（備考）右側の写真は後列左から、平壤の弟・金泰均（3男）、父、金泰正。

*1 松濤園にこもって書いた本を、松濤園に行ってきた孫に手渡すことになった偶然の意味について述べていると考えられる。

5-2. 成佛寺の風鈴の音は佛國寺を呼びおこし

母は長いあいだ、平壤に来てほしいとの父の懇願にも、周囲の勧めにも、行きづらい訪問をどうしてやるのかという態度をしていました。母は私たちに、テニスン（Alfred Tennyson, 1809-1892）の叙事詩「イーノック・アーデン」の内容¹²を比喩的に想起させたりもしました。

ところが父は1995年に脳卒中をおこし、その後遺症が少しずつ悪くなってきました。1998年、母はついに父に会いに行きました。その頃には、既に父は記憶力が依然より衰えていましたが、昔のことは鮮明に覚えており、それなりに2人は対話を続けることができたのではないかと思います。^{ソン}成佛寺〔黄海北道沙里院所在の寺〕での2人の写真【図6】は、55年前の^{ブルクサ}佛國寺〔慶尚北道慶州所在の寺〕での新婚旅行の写真【図7】を思い起こさせます。



図6 48年ぶりに再会した父母（1998年7月、黄海北道沙里院市所在の成佛寺にて）

¹² 愛する家族を養うために貿易船に乗り航海に出たところ、暴風雨に遭ったイーノック・アーデンは、ながい月日の後、九死に一生を得て帰ってくる。イーノックを10年も待っていた妻は夫が死んだものと信じ、イーノックの友だちと結婚して幸福に過ごしていた。これを知ったイーノックは、死ぬまでかれらに自分の生存、帰郷の事実を知らせない。



図7 新婚旅行中の父母（1943年3月24日、慶尚北道慶州市所在の佛國寺にて）

父は、体が不自由になった後も、震える筆致で母に簡単な手紙を書きました。父が2000年3月1日に亡くなったという報せを受けて、歳月に打ち勝つ人はいないのだなど、あらためて感じました。平壤の弟は手紙のなかに父の遺髪を少し切って同封してくれましたが、そのきめ細やかな心をありがたく感じました。

父と同年配だった許^{ホウン}雄先生（ソウル大教授、ハンゲル学会会長を歴任した国語学者、1918-2004）は、父の訃報を聞き、父が北に行かず南で研究に邁進していたら、より多くの業績を積んだだろうとおっしゃっていたそうです。虎は皮を残し、人は名前を残すという昔の言葉がありますが、この「名前」というのは、まさに「精神世界」だと思います。私たちは、今日も父の世界で呼吸をし、父を少しずつでも学んでいくことに努めようと思っています。

おわりに

今回のシンポジウムを準備してくださった方々の助力により、私たちは期待していたよりも多く、より深く父の生の痕跡を知ることになりました。感謝の念は言葉で表現しつくせません。今回、私たちは主として父の年譜の作成を手伝いましたが、1910年代から今日までの間を、1日に何度もタイムマシンに乗って行ったり来たりした感じがします。一知識人の生涯に関する話は、一国の歴史の1頁でした。

興味深いことに、父が翻訳したモーリス・クーラン (Maurice Courant, 1865-1935) の『朝鮮書誌』序論の終わりのあたりに、朝鮮について「運命のいたずらにより真価を存分に発揮できなかった」という言葉が出てくるのですが、この言葉は父にも適用できるのではないかと思います。おそらく学問活動における社会的な条件と制約により、父は学者としての資質を十分には発揮できませんでしたが、学者としての父の生涯が決して意味のないものではなかったと言っておきたいと思います。父は、誰でもしたがることよりも誰かがしなければならぬことをしようとしたと考えているのですが、他の人があまり選ばなかった哲学科に進学し、言語学を勉強したことは、そうした脈絡から理解できます。父が成し遂げられなかったことを成し遂げることは、いまや後学や子孫の役割なのでしょう。

私たちが育ちながら、胸のなかにだけ大切にしまっておき、他の人には特に話してはいなかった父の人間的な側面を、本日ここで皆さんに少しでも理解していただけたのではないかと思いますので、心が満たされる思いです。

時代の渦のなかで、民族語の研究に生涯をかけ、どんな環境のなかでも「最後まで科学活動をしつづける」と言った父の意志と夢がぱっと花開くことができなかつたのは残念ですが、遺族である私たちは学者としての父の人生を振り返ってみるきっかけがつけられたことを、たいへん大切に思っ

ていますし、特にこのシンポジウムを主管してくださり、充実した論文を
発表して下さった方々に、深い感謝の意を表したいと存じます。

ありがとうございます。

附録1

1986年1月15日、父が4人の子どもに対し、離別して初めて送った手紙の全文

혜자, 태정, 혜명, 태성이에게

1950년 8월 초 평양교외의 어느 농촌집앞 시내물에서 너희들과
함께 목욕을 하고 헤어졌듯이 이같이 기나긴 리별의 첫시작이
될 줄이야 어떻게 알았겠느냐? 너희들과 헤어진후 어린것들이
어디서 쪽잠이라도 번번히 자고있는지 마음속 깊은곳에서 언제나
걱정하고있었는데 수십번이 지난 오늘 뜻밖에 너희들의 소식과
사진을 받아보게 되고 모두다 훌륭한 사회의 영군으로 자라난
모습을 보나 참말 기쁘기도 하고 대견스럽기도 하다.

그사이 물론 할머니, 백부님의 노력이 많이 깃들어있었
겠지만 누구보다도 너희들의 어머니의 공이 클것이다.

너희들이 어린하겠느냐마는 너의 어머니에게 직접 보내지 못하는
나의 변함없는 정까지 곁해서 언제나 어머니를 잘 돌보아
드리고 항상 마음기쁘게 해주기를 부랑한다.

혜자와 태정이야 나란이 서서 노래를 잘 부르던 일이며
나와 손목잡고 모란봉, 대동강가, 룡라도 등으로 산보하던 일,
대학 내방 방문에서 내다보면 집앞에서 뛰노는 모습이 잘
보이던 일 등은 지난날의 일들을 회상하면 끝이 없다.
그중에도 일하다가 문득 너희들중 누구의 생일날이란것이
생각나는 날에는 온종일 너희를 걱정을 하는 일이 많았다.
어렸을 때 혜자 우유자리가 너무 크게 났고 혜명이 눈썹밑에
흥진이 생겨 너희들의 어머니와 함께 녀려했었는데
그면서 어떻게 되었는지? 멀혀다니는 태성이를 보고 잘
생겼다고 사람들이 부러워하던 일도 생각한다.

나는 그사이 많은것을 체험하는 가운데 항상 신념과
의지를 굳게 하면서 내가 찾은길, 내가 걷는 길에 대한
자부심과 긍지를 가지고 조국의 과학발전과 후대교육을
위해 성실히 일해왔다. 특히 위대한수령 김일성주석님과
친애하는 지도자 김정일 선생님의 따뜻한 품속에 안기며

오늘까지도 마음껏 과학람구의 걸음 걸을수 있는것은 무엇보다도 큰 나의 행복이다. 너희들도 광산 정의바 진보를 사랑하고 새것에 민감하며 몸은 비록 이국땅에 있어도 언제나 민족적 광심을 지니고 조국의 발전과 조국의 통일을 위해 힘을 아끼지 말기를 바란다.

몸만 건강하면 앞으로 반드시 만나게 될 날이 있을 것이다. 대륙과 대양을 사이에 두고 나와 너희들이 떨어져 있다 하더라도 다같이 희망을 가지고 살며 관마음한 뜻으로 조국을 사랑하고 민족을 사랑하는 애국애국의 사람이 되자.

사진으로 밖에 보지 못한 며늘아기를, 사위들에게 나의 인사를 전한다. 모두 훌륭한 젊은이들일것이다.

그리고 손자, 손녀들 - 얼마나 재롱들을 피우고 재간들이 노릇들을 하고있겠나?

형수님과 화자 사진을 보니 반가웠다.

연식도 잘 있었는지? «삼촌, 삼촌» 하고 따르던 그 목소리가. 귀에 쟁쟁하다.

새해에도 모두들 건강하고 많은 일들을 성실히 하기 바란다.

1986. 1. 15

아버지 씬

惠慈、泰正、惠英、泰成へ

1950年8月初め、平壤の郊外のある農村の家の前を流れる小川の水で、お前たちと一緒に水浴びをして別れたことが、これほどまで長きにわたる離別の始まりになろうとは、どうして知り得ただろうか。お前たちと別れた後、幼子たちがどこかでうたた寝でもちゃんとしているかどうか、心のなかの深いところでいつも心配していたが、数十年経った今頃になって、思いもよらずお前たちの消息と写真を受け取り、みんな立派な社会の担い手として育った姿を見ると、本当に嬉しくもあり、誇らしくも思う。

この間、もちろんお祖母さんや伯父さんの努力のおかげもあるだろうが、誰よりもお前たちのお母さんの功が大きかったことだろう。お前たちなら

大丈夫だろうが、お前の母親に直接送ることのできない私の変わらぬ情も合わせて、いつも母親をちゃんと手伝い、常に嬉しい思いにさせてあげてほしいと願っている。

惠慈と泰正が並んで立って歌をうまく歌っていたことや、私と手をつないで牡丹峰、大同江の川縁、綾羅島などを散歩したこと、大学内の部屋の窓から外を眺めると家の前ではしゃぎ回る姿がよく見えたこと、などなど、過ぎ去った日々を回想すればきりが無い。なかでも、仕事をしながら、ふとお前たちのうちの誰かの誕生日だったということが思い出された日には、一日中お前たちのことが気になってしょうがないことが多かった。小さかった頃、惠慈の種痘の跡が大きくなったり、惠英の眉の下に傷あとができたりして、お前たちのお母さんと一緒に心配したものだが、大きくなってどうなったか。おんぶしていた泰成を見て、周囲の人がいい顔をしているとوراやましがっていたことも思い出される。

私は、この間、多くのことを体験したが、そのなかでもいつも信念と意志を固くし、私が求める道、私が歩く道に対する自負心と矜持をもち、祖国の科学発展と後身の教育のために誠実に働いてきた。特に偉大なる首領金日成主席と親愛なる金正日先生の温かいふところにいだかれ、今日までも心ゆくまで科学探究の道を歩くことができたのは、何よりも私の大きな幸福だ。お前たちも、常に正義と進歩を愛し、新しいことに敏感になり、たとえ体は異国の地にあっても、いつも民族的な良心をもって、祖国の発展と祖国の統一のために力を惜しまないことを望む。

体さえ健康であれば、いつか必ず会う日が来るだろう。大陸と大洋の間にはさんで、私とお前たちが離れているとはいっても、みんな一緒に希望をもって生き、心をついに合わせて祖国を愛し、民族を愛する愛国愛族の人になろうではないか。

写真でしか見られない嫁や婿たちに、私からの挨拶を伝える。みな立派な若者たちだろう。

それから孫たち——。どんなにかわいらしさを振りまき、どんな才能ぶりを発揮しているか。

兄嫁とファジャの写真を見てうれしかった。ヨンシクも元気か。「おじさん、おじさん」とついてきたあの声が耳に響いている。

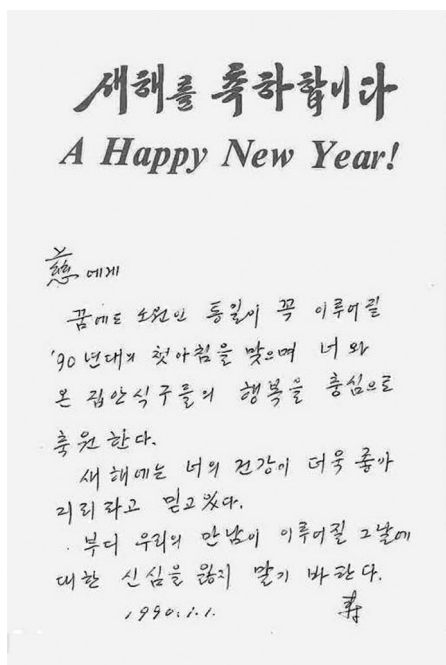
新年もみな健康で、ひきうけた仕事を誠実にこなすことを望む。

1986年1月15日

父より

附録2

1990年1月1日、父が闘病中の長女・金惠慈に送った年賀状の全文



慈へ

夢にも願う統一がかならず達成されますように。'90年代の最初の朝を迎え、お前と家族みんなの幸福を心から祈る。

新年には、お前の健康がもっとよくなると信じている。

どうか、われわれの再会が果たされるその日を信ずる心を忘れないように願う。

1990年1月1日

壽

(板垣竜太 訳)